

<エッセイ>日文研「創立三〇周年を迎えて」

著者	サウエッタナン チャワーリン
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	72-75
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006692

<エッセイ>日文研「創立三〇周年を迎えて」

著者	サウエッタナン チャワーリン
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	72-75
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006692

日文研「創立三〇周年を迎えて」

チャワワーリン・サウエッタナン

蝉の声を聞いたたびに日文研を思い出す。京都大学で修士号・博士号を取得し、タイのチュラーロンコーン大学で数年間専任講師をしていた私は、二〇〇六年の夏、あの世界的に有名な国際日本文化研究センターに客員研究員として赴いた。若手研究者にとって夢にも思わなかった人生の転機である。

あの日から研究者への道が徐々にひらけたとも言えよう。日文研は四季折々の美しさを見せる桂坂にある、優れた人材にも恵まれた立派な研究機関である。コモンルームで交わされる会話は研究に対しても人生観に対しても常に刺激を与えてくれた。一年中暖かい光に包まれるコモンルームでのゆっくりと流れる空気は、あれから一〇年経った今でも私の身体に沁みついている。

日文研に着任してまもなく、「エジプトのシンポジウムで発表してみませんか」という突然のお誘いを招聘教員の山田奨治准教授（当時）からいただいた。日本研究を普及させるため、毎年世界のあちらこちらの国で海外シンポジウムを主催するそうだ。「えっっ！ この私がエジプトで発表するんですか？」……これもまた思ってもみないことだった。せっかく誘っていただいたのだし、エジプトには訪れたこともないし、肝心の発表はともかく、張り切って「はい、行きます！」と答えた。

それから慌てて発表の準備を始めた。現地の研究者の方々や学生さんたちに理解してもらうために、彼らの関心のあることを分かりやすく発表するようにという貴重な助言を山田先生からいただいた。大学院では自分の関心のあることにしか眼を向けていなかった研究者の私は、初めて聞き手の関心やそれぞれの社会の必要性について真剣に向き合って考えてみた。

シンポジウムでは「Multi-dimensional approaches to Japan」というテーマで、日本とアラブの文明比較、思想史、文学、言語学などの話題が取り上げられた。宗教及び社会の厳しい規律によって抑えつけられているように見えるエジプト女性ならきつと興味を示してくれるだろうと思って、「広告に描かれる女性像」について発表することにした。山田プロジェクト研究室や研究協力課の皆様のおかげで準備は順調に進んだ。

いよいよ出発の日がやってきた。ミラノ経由カイロ行きのアリタリア航空だった。ミラノに一泊して翌朝カイロに向かう予定だったが、ミラノ空港のチェックインカウンターでなぜか私だけが引き止められた。「エジプトのビザがないから搭乗券は発行できない」と言われ、次の便で日本に帰されるというのである。

考えてみれば日文研からの乗客は研究者、大学院生、事務職員を合わせて二〇人ぐらいだが、私とロシア人留学生の二人を除いた全員がエジプトのビザが要らない日本人だった。搭乗時刻は刻々と迫ってくるのに、あまりのショックでどうすればいいかも分からない自分が本当に情けなかった。その時、片倉もとこ所長（当時）が言い出した。「みんな先に行つて。私はチャワリーンさんと一緒にグラウンドスタッフと話してみる。」私の不注意でこんな大変なことになったのに、片倉所長をはじめ、山田先生他三人の先生・事務の方がどこにも行かず、私の運命が決まるまで忍耐強く一緒に残ってくださった。

搭乗時刻があと三〇分になったところで、もう時間がないと思った。ミラノであと一泊して翌朝一人で日本に帰ると片倉所長に言ってみた。でも、片倉所長の決意は少しも揺れなかった。片倉所長や日文研の仲間の熱い思いが伝わったのか、グラウンドスタッフの男性がいきなり搭乗券を差し出し、「入国はできないと思うけど、とりあえず行ってみろ」と言った。

ミラノからカイロへの飛行時間は約三時間半しかなかったが、私にはまるで一日のように思えた。ハラハラドキドキしている私に、「一緒に行こう。大丈夫だから」としっかりした声で引っ張ってくださった片倉所長は本当に大きな心の支えであった。カイロに着いて、日文研の研究者と一緒にカイロ大学のシンポジウムに参加するためにやってきた、と入国管理職員に説明すると、意外にも速やかに入国させてくれた。きっと名高い日文研のおかげで何とかその場でビザを発行してくれたのであろう。

これは二度としない経験ではあるが、それまで国際学会に参加したことのなかった私は、日文研の優秀な先生方と並んで発表でき、地元の研究者の方々や学生さんと交流することもできて本当にうれしかった。家族に反対されても、「チャワリーンのように大学の先生になりたい」と夢を語ってくれたシナイ半島出身の女子大生の顔を今もくっきりと覚えている。日文研が私をどんどん広い世界へと導いてくれたような気がした。

「研究者は知識を社会と共有することで社会に貢献するものだ」ということを日文研に教わった。どんなに難しい研究をしてもその結果が人に伝わらなければ意味がないということ。日文研で過ごした一年間は社会との関わりについて考えさせてくれる訓練となった。海外シンポジウムから日文研フォーラム、公開講演会、東京講演会、学術雑誌、それから桂坂小学校の出前授業まで、さまざまな形で研究活動を国内および国際レベルで社会に広げるべく努力

を厭わない日文研に本当に心から感謝している。

日文研の一年間は長いようで短かった。大学院や職場で学ぶことのできないその経験こそが、今研究者の道を歩んでいる自分にとって何より有意義なものだった。社会に貢献する研究者としての義務を果たすこと、チームでそれぞれの専門を活用して共同研究することなど、日文研から学んだことは数えきれない。共同研究の機会に恵まれた日文研で、もう少し積極的に活動すればよかったと一〇年前の自分を悔やむ思いもあるが、懐かしい蝉の声を楽しめる日がまたいつか訪れてくれると信じよう。

(マッコーリー大学講師)